



2017・10・11

**SORA** 75号

京都 天谷翔子

をさなごと金魚しばらく預りぬ  
帰らぬと泣いて離さぬ捕虫網  
日焼子や特急券を握りしめ  
次々に溺るる蟻を見てをりぬ  
トマト挽ぐお天道さまありがたう

岡垣 田中とし江

魚どつと夏の潮ごと波止に揚ぐ  
烏賊船の戻り未明の波止照らす  
炎天や鋳夫像より炭坑の唄  
川の山車より弧を描く祝ひ餅  
浮萍を盛りあげ鯉のあらはるる

兵庫 青木朋子

蝶の目を恐れし友の早世す  
守宮逃げ吾も逃げたる朝の窓  
寝転んで空は我がもの花火待つ  
蝉を追ふ少年たちの網真白  
井戸水に吾は育てり真桑瓜

糸田 宮井知英

初蝉や蛇口の水の絡みつく  
熊蝉や昼餉仕度の水の音  
一夜明け雲の流るる植田かな  
田水張る一町先は母の星  
遠山の押し寄せて来る梅雨入かな

福岡 山内 碧

雨過ぎし木々の光や夏料理  
昇き山の怒濤にしぶく勢ひ水  
マンシヨンの柱無き部屋敗戦忌  
退院後の日々は新たや縷紅草  
滝壺へ下る黄泉路を辿るごと

福岡 栗原 京子

保護さるる犬の毛固し梅雨晴間  
悦楽や仔猫と我と日だまりに  
里親をさがす仔猫ら昏々と  
卵みな正しき形半夏生  
蜂の巣を破壊せし母偉大なる

宮崎 田代 民子

向日葵の低く波打つ畜魂碑  
やみくもに鶏の砂浴ぶ油照り  
薬医門の柱の傷み蟻地獄  
雨後の庭十葉の香のうつつと  
でで虫をつつき退屈まぎらはす

福岡 矢野 百合子

梅雨の入り烏スキップ繰り返し  
手も足も置きどころなき熱帯夜  
片陰や今も涸れざる望東尼の井  
滴れり渾身込めて膨らみて  
改むる術見出せず髪洗ふ

直方 曾根 富久 恵

簪は使はぬままや更衣

路地の日は壁に移りぬ濃紫陽花

南天の花のこぼれて人住まず

雨の日は家ぢゆう匂ふ干十葉

茅花流し渡し場跡の大樹かな

春日 三井所美智子

代掻けば一番乗りの鷺の声

早苗饗の漢に持たす酒まんぢゆう

どんと挿す百合の香夜はなほ強し

終戦忌逝きにし叔父の許嫁

人形の寝すれば瞼閉づ晩夏

大阪 田岡 千章

約束の合図は目にて桐の花

子燕や駄菓子屋萬屋とんと見ぬ

植ゑし田の夕べ手応へなき広さ

隠しごと隠し通して梅雨に入る

梅雨満月八百屋お七に追ひ抜かる

東京 今井 康子

朝露を律儀に並べ禅庭花

綿菅の霧に紛れぬ白さかな

ひとつひとつ花の名挙げてお花畑

未草目覚め始めし尾瀬ヶ原

飲むほどに体透きゆく岩清水

北九州 横田敬子

浚渫船べつたり座る夏霞

教会へ一本道や麦の秋

路地裏に仕立屋の札枇杷熟るる

井戸蓋に忘れ数珠あり沙羅の花

警官に呼び止められし炎天下

太宰府 西住三恵子

枇杷の実の熟れきつてをり骨董屋

封筒のシールは小鳥青葉風

ポタンかがりの糸のからまる薄暑かな

余生てふ放課後が好き金魚玉

如何に在す彼岸の父母や天の川

福岡 樋口みのぶ

島裏へ廻れば荒ぶ秋の灘

兄いつも先を歩めり墓参り

草の穂や祖父に習ひし竹とんぼ

亡き父の笛の飴色雁渡し

田の神へ渡る板橋曼珠沙華

福岡 あさなが捷

竜神の白煙荒く山笠走る

盆綱引き真中を断ちて終はりけり

告発に卓のざわつく青葡萄

罵声のみ浴びしか毒茸の朱は

大阿蘇や歩めば飛蝗とび散りて

長崎 松尾龍之介

郭公や殿も憩ひし峠茶屋

浄めたる水の干ぬ間のさくらんぼ

瀬戸ひとつ越えし安堵や不如帰

湧水の精が宿るよ青すすき

蛍火を這はす手のひら感情線

粕屋 秋 千 晴

大葉より生まれしやうに子かまきり

まだ飛べず螭螂の子は跳ねてをり

体より鎌を大きく子かまきり

子かまきりすぐに青鎌かざし来る

雨粒をつけ蜘蛛の囿の撓みけり

北海道 押田裕見子

一合の甘酒に酔ふ齡かな

旧友とくぐる蕎麦屋の麻暖簾

日盛の無言を通す石仏

炎天をのがれ駆け込む地下通路

一粒の黒く重たく盆の雨

兵庫 岩井京子

豪雨の地思へば暑いなど言ふは

おのおのの鉢持ち帰り夏休み

水盤の石ことさらに片寄せる

水羊羹つるりとのだへすべりけり

出刃包丁研ぎて涼しくなりゐたり

神奈川 窪 み ち 子

もろこしの花堂々と一坪に

駅名に残す出水のありしこと

梅雨晴間黒部の樹々の匂ひ立つ

梅雨雲を押し拂ひたる劔岳

街すべて燃えゆく記憶大夕焼



空集抄 — 柴田佐知子抽出

洞窟は洞窟のまま沖繩忌

角野良生

独りにも昼がくるなり金魚玉

千波悠

暗がりに牛一塊や田水沸く

深川淑枝

仇討の刃は長し飾り山笠

高倉和子

何もせぬことの疲れや夜の蟬

岸洋子

踊りの輪二人でぬけし波の音

吉田菫

鋸のあと鉋の音や日の盛り

秋千晴

学校につくづく広し夏休み

山内碧

春愁と云うて怠くる一日かな

田坂能雄





氏神の寄付を乞はれし竹床几

ぶつぶつと言うてゐるかも蟻の列

逝きし身のまだやはらかし夏の月

土用あい怠けて一日老いにけり

ボートもて新聞配る梅雨出水

土用あい厩に馬のさびしき眼

逢ひたくて丸ごとかじる青りんご

ふるさとの大きな虹に迎へらる

スマートフォン触角として夏の街

もう会へぬ人の夢見る熱帯夜

朝顔や生くるため何捨てようか

粽解く傍に赤子を眠らせて

まばたきもせず赤ん坊が金魚見る

中田みなみ

戸栗末廣

石橋幾代

永淵恵子

曾根富久恵

河原敬子

大西乃子

天谷翔子

田代貞香

仲里奈央

田邊豊子

田中とし江

苑 実耶

端居してこれまでのことこれからのこと

脱ぐといふ身づくろひあり海開

文机に葉裏離さぬ蟬の殻

父の日や一子で終る吾が家系

公園に子を抱き下ろす梅雨晴れ間

曝しけり二十歳で逝きし兄の手記

足らざるも過ぐるも災禍梅雨寒し

旋盤の油のしぶく土用入

柴刈りに行く爺さんもなく昼寝

縫るもの無くて砂這ふ浜昼顔

神の手がすくひ上げたり屑金魚

腹据ゑてひとり生きよと暮鳴けり

稲妻や子に抱きつけば疎まるる

松田明子

原友子

今井康子

石川子熊

岩下きぬ代

宮井知英

森田明成

林徹也

横田敬子

山田正子

織田高暢

矢野百合子

小林朱夏



ねころべば風ひろびろと紺浴衣

陶器屋の奥に招かれ葛ざくら

ころびさうなころびさうな子蝶を追ふ

くちなはの舌の先まで嫌はるる

時の日の大氷河より太古の水

車窓みな越後平野の青田波

青嵐雀は足を揃へ跳ぶ

特攻の遺書は達筆蟬時雨

ラムネ飲む空の青さを見つつ飲む

青柿の屋根打つてゐる夜明けかな

葉桜や午後は眠たき学生ら

海の日や水筒の水たつぷりと

梅雨どきのはねたる髪を手櫛して

西住三恵子

えとう樹里

宮川正彦

山本則男

窪みち子

青木朋子

岡村尚子

古賀真理

遠山のり子

田中素直

武和希美

畑由子

津隈祐美

# 空作品評

柴田佐知子

独りにも昼がくるなり金魚玉

千 波悠

時が移れば昼になる。ごく当然の時間の推移だが、  
〈独りにも〉によって、アンニュイな翳りがうまれてくる。季語の〈金魚玉〉の静けさがいい。

暗がりに牛一塊や田水沸く

深川 淑枝

この牛は牛小屋に居るのである。私の近所の農家にも昔は牛か馬が飼われていた。どれもおとなしかった。〈牛一塊や〉によって小屋の暗がりを固めたような牛の確かな存在感が表現されている。田水が湧くころの強い日差しと牛の居る暗がり：眩しさと暗さが際立ってくる。

仇討の刃は長し飾り山笠

高倉 和子

祭は、その地の人が誰よりもしつかりと詠むべきだと思っ

年出かけ必ず俳句を作っている。

掲句は、博多人形師が仇討ちの場を組み上げた絢爛たる飾り山笠。大きく構えた太刀に焦点を絞ったことで成功している。更に目を凝らして〈長し〉を見つけたことよって、仇討の場の登場人物がそれぞれに見得をきった華やか姿なのだろうと想像され、艶やかな飾り山笠が立ち上ってくる。

何もせぬことの疲れや夜の蟬

岸 洋子

のんびりと過ごせばいいのであるが、洋子さんは働き者でいらつしやるようだ。たまに何もしないで一日が暮れると、「無為に過ごした」あるいは「一日を無駄にした」というような、うしろめたい思いや、ふとした無常観などが、何故かよぎってしまふのかもしれない。何とも損な性格である。しかしこの感覚、私もわかります。

〈以下略〉

# 空集

柴田佐知子選



拾はねば知覧の丘の落し文

福岡 角野 良生

洞窟は洞窟のまま沖縄忌

こゑ持たぬことも力や兜虫

逃げ足の試し走りか蜥蜴の子

その話汗を拭くまで待てんのか

句読点打ちどころなき暑さかな

締め込みの肉もり上がる山車を曳く

長崎 千波 悠

吐息ほどの土をこぼせり蟬の殻

夏の雲石のちらばるかくれ墓

手をつなぎゆく子の欲しや螢狩

独りにも昼がくるなり金魚玉

太閤の海へひらきて夏点前

暗がりには牛一塊や田水沸く

北九州 深川 淑枝

腰のばすとき沖を見て田草取

荒鋸に氷を挽けり夏祭

祭太鼓暮れて湖の香のぼる川

夜に入るや水音のごとき祭笛

吹かるるや身の浮きあがる子蠹螂

大瀧の全ての音をのみこめる  
福岡 高倉 和子

岩のごと牛の座れる大夏野

夜に入りて山迫りくる虫送り

仇討の刃は長し飾り山笠

手花火の芯に集まる眼かな

プールより戻りて耳のやはらかし